

第十五回

念仏が利いたわけではないだろうが、なぜかマリオンたちは自動小銃を前方に向けてダダダダとぶらばらすと、海岸の方へ急に突進して行った。そして、前と同じように集合し番号を掛け合つて、上陸用舟艇に乗つて帰つて行つた。

帰つていったのを確認してから、陸から飛び出し全身に食いついてゐる蟻どもを急いで払い落とした。払い落とすと、体のあちこちに蟻の牙が肌に食いついたまま残り、二三日その痛みが残つた。

あんな小さな生き物でも、人間が無抵抗の時に、集団で襲いかかつてくる凄さには驚いた。自分が衰弱して行き倒れた時のことを想像して、恐怖さえ感じた。

宮川もなんとか逃げおうせて、舟のエンジン音が遠のいた頃近くまでもどつてきて、前に打ち合わせたとおり、ここで初めて

「山」

「川」

という合言葉を使った。ここも危険になつたので、明日は早速ここをはなれ、できるだけ遠くへ逃げようと話し合つた。

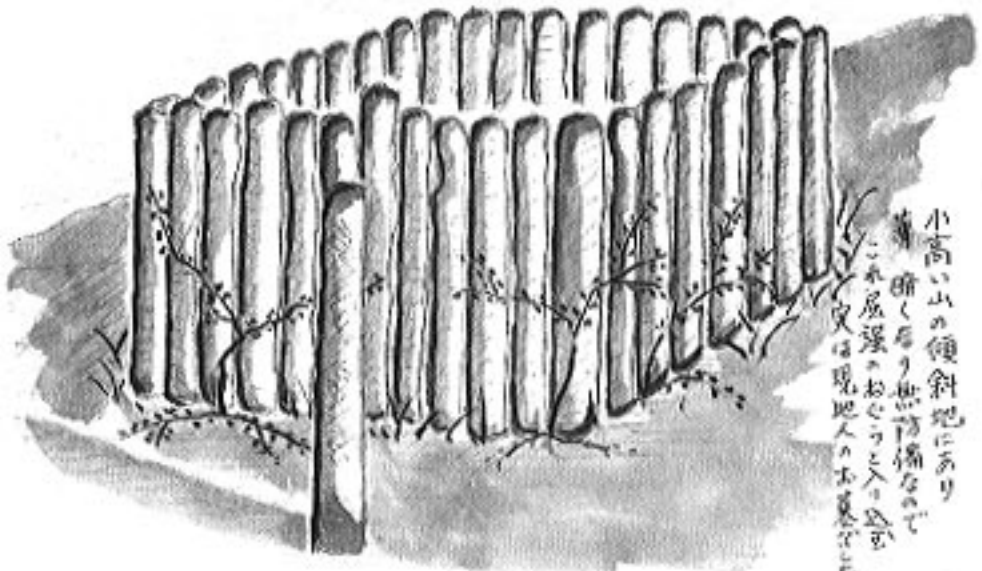
絶好の寝床

翌日、移動をはじめて何時間かジャングルの中をさまよい歩いて行くと、小高い丘の傾斜地に木の柵を見付けた。丸太を杭のように縦にして、高さ二メートル、横四メートル四方に囲つてあつた。

ジャングルはすでに夕暮れになつてきていた。獣などの外敵から身を守るには絶好の場所だ。今夜はここで寝ることにした。

持参していた三十センチ幅で一メートルぐらいの板を囲いの中へ放り込み、二人ともよじ登つて中に入り込んだ。板を敷き込み、屋根がないので満天の星を仰ぎながら、久し振りになんの心配もなく今夜は熟睡できると思つた。

だが、その夜に限つて二人ともなぜか眠つかれず、まんじりともせぬうちに夜が明けてしまつた。



小高い山の傾斜地にあり
隙くろり世防備なめて
これ屋強々おむらと入り込み
穴は現地人の墓場だ

木の柵を出て、これは一体何だったのだろうと一回りしてみた。太い丸太に鉋のようなもので粗削りな文字とも絵ともつかない印が彫つてあつた。二人でよくよく考えてみると、これはとんでもないところに寝てしまつたと気づきあわてた。現地人の墓場に違いない。

獣に死体を食い荒らされないように高い柵を巡らしてあるのだ。

柵の中は土が平たくならされていたので分からなかつたが、われわれはたくさんのお体の上で寝たわけですうりて寝心地が悪かつたと笑い合つた。

宮川とは、このとき初めて、打ち解け合つたような気がした。

この日は罰が当たつたのが、食べ物をあちこち見つけ歩いて、モシヤンケルが深くなるばかりで、これといった食べ物にありつけなかつた。

ちつと、モシモン一個を拾ひ、二人でかじりながら善後策を相談したが、よい知恵も浮かばない。結局いまままでとはすが、他の海岸線へ出てみることにした。

つづく

次回第十六回は三月二十三日(火)の予定